

太田耕造先生と興国同志会の人々

夜 久 正 雄

註・本文中の人物の敬称について、——太田先生はじめ、師事した方々ならびに直接御教示を受けたことのある方々には「先生」の敬称を用ひ、その他の方々には「氏」の敬称を用ひた。

亜細亜学園初代学長太田耕造先生（昭和五十七年十二月二十六日歿、享年九十歳）は、東大在学中の青年時代に、興国同志会といふ国家主義団体を結成して、当時の学生運動に参加した。このことを知つたのは、敗戦直後散華された明朗会十二烈士の伝『忠烈万古薫』の中の附録「思想的ニ見タル大正昭和ノ政治動向」（昭和二十年七月陸軍省調査）といふ図表の中でであつた。

その図表によると大正八年六月結成の「興国同志会」には、「上杉慎吉、天野辰夫、太田耕造、鹿子木員信、紀平正美」の名があげられ、大正十三年五月結成の国本社（平沼騏一郎、太田耕造、竹内賀久治）に直線であつてつる。

太田先生は——主としてその晩年、つまり戦中戦後しか私は直接知らないが——自らを語ることに極めて稀な方であった。少年時に既に郷里の福島教会で洗礼を受けられ、後もキリスト教の信仰を貫かれ、戦後も小石川教会、後に小岩井教会の長老として生涯を終られたことなど、重大関係者にはほとんど洩らされなかつたし、友人の方でも教会関係の人以外にはほとんど知る人がなかつたやうである。太田先生がなくなつてからそのことを知つて多勢の人々を驚かせたのも、先生が強いてそのことを隠してをられたといふやうなことではなく、内心の信仰のこととして敢て語らうとされなかつたことと思はれる。先生の好んだ言葉に「默契」といふ言葉があるが、信仰の内容は先生の「默契」であつたのである。

私どもは、太田耕造といふ人物は、政治的に見れば、平沼騷一郎氏の腹心で、国本社の中心人物と思つてゐた。これは間違つてゐないが、国本社の前に興国同志会といふ東大の学内団体があり、太田先生がその中心人物の一人であつたことを知る人は少なかつたやうである。このことを太田先生から聞いたものは、当事者以外にはないやうである。聞いてゐたら私など東大の思想的傾向を知るために根掘り葉掘りおたづねしたにちがひない。

そのことを何遍も私が言ふのは、この興国同志会のメンバーに蓑田胸喜先生の名前を見たからである。蓑田先生は私どもが師事した『原理日本』の主幹である。戦前、マルクシズムの批判に全生涯を捧げられた。東大の美濃部達吉・末弘殿太郎・田中耕太郎・津田左右吉諸教授の学説思想を批判して東大法学部の学風刷新に没頭された。ために学界ジャーナリズムからは蓑田狂気と嘲笑されたが、敗戦直後は自決して敗戦の責を負はれたのである（著書『學術維新原理日本』『国家と大学』等多数）。私はこの蓑田先生のお教へを受けてマルクシズムの誤謬を知らせていただいたので、戦前、戦中、戦後一貫して先生の弟子であることに変りはない。この蓑田先生は大正時代から太田先生編集の

『国本』に執筆してをられるが、それが興国同志会以来の盟友であつたことによるとは、太田先生の死後はじめて知つたことである。

太田先生は、三井甲之・蓑田胸喜両先生の学統に連なる小田村寅二郎理事長の国民文化研究会の顧問をしてをられたのも、学生時代からの三井・蓑田両先生はじめ原理日本諸同人に対する友情にもよるのであつたらう。死後そのことを知つて驚ろいたのである。

同じやうな意味で、この興国同志会の人々と太田先生との友情は生涯を貫ぬくものであつたと思はれる。岸信介氏と太田先生との友情もまたこの時からのものであつたとみられる。「默契」といふ言葉はこの愛国の同志的感情にも用ひられるであらう。

この「興国同志会」といふのは、当時、東大法学部・吉野作造博士の「民本主義」を指導原理とする「新人会」に對抗するものとして、上杉慎吉博士の門下の学生によつて結成された「木旺会」の後身とみられている。

新人会はのち社会主義・共産主義に移行する。興国同志会は森戸事件を契機として分裂し、国本社（平沼騏一郎主宰、太田耕造、竹内賀久治その他）、日の会（鹿子木員信、北一輝、大川周明、岸信介、中谷武世その他）、神兵隊（天野辰夫）、原理日本（三井甲之、蓑田胸喜その他）となる。

かう見てくると、大正八年結成の興国同志会と大正七年結成の新人会とは、その後の日本の思想界の二大潮流の源となつたことが推しはかれるのである。

「興国同志会」は当時『戦士日本』といふ雑誌を作つたといふが、この雑誌を入手することができないので、正確なメンバーも会の趣意も明確には知り難い。太田先生が亡くなられた今日では、生きてをられるのは恐らく岸信介氏

おひとりであらう。

「新人会」は社会主義のバイオニアであつた関係で、研究も行き届いてをり、資料も残つてゐるであらう。『広辞苑』には次のやうに書いてある。

「大正七年十二月、吉野作造・麻生久らが後援し、赤松克麿、宮崎竜介らによって結成された東京大学内の社会主義学生団体。人類解放運動を綱領とした。昭和三年解散。」

『日本歴史大辞典』（河出書房）には、発足以後、マルクス主義学生運動の中心的存在となる経過が、次のやうに記されてゐる。

「……以後いちじ沈滞したが、二四年（大正十三年）活動が活発となり、学内に勢力を伸展、同時にマルクス主義団体としての色彩も、しだいに明確となつた。以後約一〇〇名の会員を有し、関東地方の学生運動の中心にあつたが、三・一五、四・一六事件など多数の検挙者を出し、かつ大学当局も二八年（昭和三年）四月十七日解散命令を發した。……翌年十一月全日本学生社会科学連合会（学連）解体にともない、自発的に解散を宣言した。」（松尾尊允氏）

右の三・一五事件については、「昭和三年三月一五日、一道三府二〇県にわたつて、日本共産党員ら約一六〇〇名を一斉に検挙・弾圧した事件」（『広辞苑』）といふ。大正十四年公布の治安維持法に拠るものである。

この新人会と興国同志会との対決については、当時学生であつて、後、内務官僚となり終戦内閣の内務大臣として、いはば左右兩翼の運動の取締りに當つた安倍源基先生の言ふところが真を穿つてゐるものと思はれる。

《東大では、吉野教授の指導を受けて、赤松克麿（私と中学同級生）、宮崎竜介、石渡春雄の三名が中心となつて、

大正七年十二月新人会を結成した。新人会は学内の社会主義研究会であり、学生社会運動のさきがけであった。これにつづいて各大学で学生社会運動が起ったが、早稲田大学の浅沼稻次郎、三宅正一、平野力三、稲村隆一等を中心とする建設者同盟や、高津正道、高瀬清らの暁民会はその主なものであった。

東大では新人会に対抗して、上杉慎吉教授の指導する天野辰夫、蓑田胸喜、菊地利房等により、興国同志会が結成された。上杉教授は天皇主権説論者であって、美濃部達吉教授の天皇機関説と対立して、その論争は学界の大関心を集めていた。……

大正九年一月号の東大経済学部機関雑誌『経済学研究』に、森戸辰男助教授の「クロボトキンの社会思想研究」と題する論文が発表されると、興国同志会は、無政府共產思想を宣伝するものとして猛烈な森戸排撃運動をはじめ、山川健次郎東大総長や南文部次官などを訪問してその処分を要求した。

結局森戸助教授は辞職に追いこまれたが、この頃から大学内でも、思想的に左右の対立は激しくなり、早稲田大学でも、保守派の学生や校友達が、赤化排撃を目的とする縦横倶楽部を結成した。(中略)

労働運動その他社会運動は、大正十年頃になって、ボルシェビズム(共產主義系)と、無政府主義(サンジカリズム)系の対立がはげしくなったが、同十一年七月日本共産党が結成され、翌十二年九月の関東大震災の時無政府主義者大杉栄夫妻が憲兵の手によって殺された結果、共產主義系が圧倒的に優位を占めるようになった。……

以上述べたような思想界の混迷、ことに共産党をはじめ左翼勢力の伸張に対して、国粹主義者や国家主義団体が危機感を抱くようになったのは自然の勢いであった。(安倍源基著『昭和動乱の真相』昭和五十二年刊、八四―八六ページ)

さて、興国同志会は、いはゆる森戸事件によつて分裂し、自然消滅となつたと言はれるのであるが、その消息にふれてゐるものとして岸信介氏の文（昭和三十五年刊・岸信介自伝『我が青春』）をあげることができる。

「興国同志会に訣別

当時の私の考えでは我が国体は日本民族結合の中心であり日本国家発展の基礎である。従つてこれを明確にし維持し、苟も国体に関して事を紛更しこれに改変を加えるが如きことは断乎として排せねばならぬ。然し徒に神聖化し国民と遊離した観念論に墮してはならぬ。天皇を国民と共に国民の中に在らしめねば真の国体の精華は發揮できぬ。この意味では天皇を常に雲の上に置き、一般国民との間に藩屏を設けるような制度は悉く改めねばならぬ。華族制度の廃止や宮内庁の改革は焦眉の急である。極端なる国粹主義者とこの辺りに於てもびったりせぬものがあつた。

更に私有財産制度の問題は国体問題とは全然別個の問題で、その変革は何等国体の変革とはならぬ。或る意味では真の国体の精華を發揮する為には、所有権絶対と言うローマ法的観念はこれを清算せねばならぬ。私有財産制度は時代と共に改革せらるべくこれを変革することと国体の変革とは厳に区別せられねばならぬ。国体擁護が私有財産制度の擁護と混同されてはならぬ。この点に於ては森戸事件に関する根本的意見の相違となつた。

森戸事件とは経済学部の教授が経済学雑誌の第一号にクロポトキン学説を紹介し、私有財産制度に対する改革論を唱えられたのに対し、訴追が行われると共に学園内に於ても議論紛争熾々たるものあり、興国同志会は演説会を開いてこれを糾弾することになつたのであつた。私は前述の理由からこの糾弾には反対で遂に興国同志会から袂を

分って了ったのである。当時同志会の同志の一人平泉澄氏（後に文博、文科大学の史学教授となった）は私の訣別を止めようとして屢々懇請されたけれども涙を振って訣別した。然し同志会を脱会してその運動に加はらぬだけにただで、同志諸君との交友関係は別に変わらず、又上杉先生に対する私の尊敬とその人格的魅力に対する私の憧憬は少しも変らなかつた。」

右は岸信介氏が巢鴨の「獄中の徒然にものした小文」といふことである。なほ同氏はまた当時のことを「昭和動乱前期の回想」として中谷武世氏との対談の中でも語つてゐる（昭和五十年十一月二十一日）。それによると岸信介氏は、興国同志会を出て、「日の会」を作つたことになつてゐる。「日の会」といふのは、興国同志会のあとをついだ形で東大内に出来た学生団体で、大川周明、北一輝、鹿子木員信氏らが指導してゐたといふことである。北一輝氏について岸信介氏が次のやうに書いてゐることは、興国同志会に訣別する思想的な理由をも語つてゐると思はれる。

「私は何の機会に、誰に連れて行つたのかははっきり記憶しないけれども、二、三人の学生と一緒に牛込の猶存社へ行つて北一輝に初めて会つたわけだ。それまで北一輝の書いた『日本改造法案』を、私は誰かからそれを借りて、一晚徹夜でそれを写本したことがあるが、あの考え方に非常に強い印象を受けていた、それでまあ猶存社に行つて北に会うことになつたのだと思う。私はあの北一輝の風貌に非常に魅力を感じた。……大学時代は上杉先生には相当私も私淑しておつたし、上杉先生に対する尊敬の念は変らないけれども、その外の人では、北一輝の印象が一番深く、今でもその時の感動を忘れ得ません。」

なほこの「日の会」ならびに「猶存社」（満川亀太郎・大川周明）「行地社」（北一輝）については、伊東六十次郎先生の名著『満洲問題の歴史』（昭和五十八年十二月刊）下巻「アジア復興運動の展開」に詳しい。

太田先生が興国同志会から国本社の創立に参画していた経緯は、『竹内賀久治伝』（竹内賀久治伝刊行会、太田耕造、立花定ほか、昭和三十五年刊）の中で、太田先生自身が語つてゐるのである。

「先生（竹内賀久治）が最初企画した雑誌『戦士日本』は、学生同志の内部事情のため、ついに創刊号を出しただけで挫折してしまったので、先生（同前）は別個の計画を立てていた。回転の早い先生の頭脳は、一カ所にいつまでも停滞することはなかった。その年の秋、興国同志会の演説会が、神田の仏教会館で開かれた際、会場の一隅に先生（同前）の姿が見られた。各弁士の熱弁に耳傾けていたが、太田耕造氏の所論と志操堅固を見抜いて、翌日太田氏のもとに、話したいことがあるから来てくれ、という電話をかけて来た。

太田氏が出向いて行くと、旗幟鮮明の雑誌を出すから手伝ってもらいたいという突然の話である。先生（同前）の中六番町の屋敷内にある六畳の離れが編集室で、大正十年一月一日に第一巻第一号を発刊した。題して『国本』といった。デモクラシーが民本だから、国家主義を標榜する雑誌は『国本』がよかるうと、簡単に決まった（太田耕造氏談）。」

『田辺治通』（田辺治通伝記編纂会、太田耕造他、昭和二十八年七月五日発行）にも、同様の記述がある。

「国本社の誕生は大正九年東京帝国大学内に出来た興国同志会がきっかけとなった。上杉慎吉博士が指導者で天野辰夫らがこのなかにいた。当時同大学には社会主義を信奉するグループ新人会があり、右翼には七生社ありで、学内には左右両派の抗争が絶えず、森戸事件と称する流血の惨事まで引き起したことがあった。興国同志会は『戦士日本』という雑誌を刊行して国家主義運動をやっていたが、たまたま森戸事件を契機として内部分裂を起し、この結果『戦士日本』も創刊号で廃刊になった。これを残念に思った太田耕造らは、学内では法、文学部教授教氏、学

外では竹内賀久治等内外の同志と協議して、興国同志会とは全く関係のない国本社を設立することになり、十年一月平沼騏一郎男を有力なバックとして発足し、雑誌『国本』を創刊した。会の中心人物は弁護士竹内賀久治と太田耕造で、この太田と竹内が結ばれた動機は大正八年夏神田の仏教青年会館でやった太田の国本主義の演説の趣旨に竹内が共鳴したからであった。」

「国本社の特色は役員に各界の名士を網羅したことで、司法部内から鈴木喜三郎、小山松吉、和仁貞吉、林頼三郎、小原直、塩野季彦、山岡万之助、岩松通世など、軍人から東郷平八郎、井上良馨、上原勇作、有馬良橋、斎藤美、宇垣一成、加藤寛治、大角岑生、末次信正、荒木貞夫、真崎甚三郎、小磯国昭、松井石根、永田鉄山、菊池武夫等の諸将星、財界では池田成彬、結城豊太郎、学界では山川健次郎、古在由直、荒木寅三郎、その他原嘉道、本多熊太郎等があった。田辺（治通）もこの時理事の一人として入った。」

この国本社の前身の国本社の創立者竹内（賀久治）、太田（耕造）の両名が入ったことは無論である。平沼男（爵）が国本社を主宰するようになって、機関誌『国本』が発行され、『国本新聞』の発刊も見、全国各地に講演会が開かれ、一時は支部百七十、会員二十万を算えた。……

昭和十一年二月二十六日のいわゆる二・二六事件直後、平沼男は枢密院副議長から議長に任ぜられたので国本社の会長を辞任し、六月四日に国本社は解散した。」

この国本社が、戦前における反共勢力の中心であったことはいふまでもない。

『国本』創刊号は大正十年一月一日発行、表紙に「国家主義の高調」と記し、巻本に「吾徒は最高原理の体现たる

真正国家の建設を期する為めに、敢然として国家主義を提唱する」とある。

巻頭言は次の通りである。

「共産主義や無政府主義の台頭は、戦後の思想界が混乱せる為めの一時的変態的現象たるに過ぎぬ。此の流行思想の漸く衰へつゝあるは、些の不思議もない。今や邦国の心核より湧起つた国家主義は、拍天の勢を以つて勃興し、飛瀾一捲、浅薄なる唯物主義、無節度なる排外思想の類を掃去し、將に其本体を顯現せんとしてゐる。或人は言ふ、国家主義は独露を崩壊せしめたではないかと。何ぞ知らん、非国家主義こそ却つて彼等を崩壊せしめたのであつて、国家主義は独露の為に誤られ、大なる損失と汚辱とを受けてゐるのだ。復活した彼等は、表明は如何ようにもせよ事實は国家主義の手套を穿つて来たではないか、国家主義は国民生活の文化的充實を期し、国民の胸奥に祖国に対する歡喜の念を湧起せしめ、国民の精神言動に対して不断の緊張を促し一脈清新なる情藻を濼はせる職能を持つてゐる。偉大にして純潔なる日本人の個性と自由とは、是に依つてのみ獲得せらるべく、片々たる所謂新人の新思想などは、其の破片さへも、断じて是れに与るものではない。(同人)」

文末の「所謂新人の新思想」が新人会の思想を指すことはいふまでもあるまい。
内容は次の通りである。

国家の倫理(帝大助教深作安文)、マルクス思想の誤謬(三井甲之)、変更も保存も(文学博士幸田露伴)、個人と国家(学習院教授紀平正美)、国家の理想と個人の理想(伊藤恵)、国際聯盟と国家問題(法学博士阪谷芳郎)、対米問題私見(法学博士堀江專一郎)、日本の文化的使命(農学博士横井時敬)、三学長の国家観——国家の精神的基礎(農学博士古在由直)、国情を顧みて(慶大学長鎌田栄吉)、東西文化の史的觀察(法学博士平沼淑郎)、国体より見た

る創造教育（千葉命吉）、媚悦外交を葬れ（伊藤正徳）、窒息せる赤色露西亞（ボスネーリン）、白人専制よりの解放（笠木良明）、独逸の興亡について（文学博士大類伸）、無政府共產主義の徹底的批判（竹内賀久治）、旧吾依然たる政治舞台（太田耕造）、生物と人間（理学博士石川千代松）、日本の仏教を回顧して（文学博士黒板勝美）、民族芸術よりに見たる狩野芳崖（横山健堂）、帝国大学々生の思想団体（豹子頭）、短艇選手出の人物（長井善三）、創作——舜（豊島与志雄）、狂愁（磯部節治）、鼠（松本恭三）、求むる心（渡辺吉治）。

『国本』に上杉慎吉博士の論文が見えないのは、「興国同志会」が上杉門下であるといふ印象を与へたため、それと一線を画する意味であつたらしい。創刊号の豹子頭といふ匿名の「帝国大学々生の思想団体」に拠るとそのやうに考へられる。またこの匿名記事に拠ると、「日の会」の思想的なリーダーは鹿子木員信氏であるといふことである。

興国同志会に文学部学生を代表する形で名を見せた蓑田胸喜先生は当時文科にあつて、既に三井甲之先生に師事してをられたと思はれる。『戦士日本』に三井先生の論文の見える（「三井甲之著作目録」——『三井甲之存稿』所載）のも、蓑田先生との関係かと思はれるからである。蓑田先生は当時、『復活・人生と表現』の同人となつて、『人生と表現』「大津康追悼記念号」の編集を三井先生に依頼されて行ふなど活躍するが、大正十四年十二月『原理日本』を編集発行した。「知識は世界に・情意は祖国に」「凝固革命思想対不断・思想學術改革」がそのスローガンであつた。

正雄 興国同志会の中でも急進的であつたと見られる天野辰夫氏は、当時の政治家にならつたのであらう、弁護士となつたが、後、神兵隊を組織指導して、日本主義運動を貫徹した。後、神兵隊事件（昭和八年）が起る。

久夜 紀平正美先生は上杉慎吉博士の「国家は最高の道徳なり」との国家論を哲学的に発展して、国家主義の哲学を形成し、国民精神文化研究所の指導的所員となつた。

岸信介氏の興国同志会脱会に際してこれをとめようとしたといふ平泉澄先生は、東大の日本史の教授となり、「皇国護持」の史観を展開して、戦前の日本史学界を指導した。朱光会を作り、その門弟は、大学高専の日本史教員となり、戦前の青少年に大きな影響を与へることとなる。今年の二月十八日に亡くなられた。最近皇学館大学長田中卓氏の『皇国史観の対決』（二月十一日発行）といふ書物が出た。永原慶二氏の『皇国史観』を批判したものである。

以上、太田先生を中心にして興国同志会の人々を挙げてみると、大学卒業後それぞれの分野で初志を貫いたことがわかる。そして、そこに一貫するものは、共産主義に対する祖国日本防護の思想、学問であることが認められるのである。戦後これらの人々は、超国家主義者とか右翼とか言はれて、流行の新聞界、思想界、学会から排斥せられたが、昭和四十年代の大学紛争を中心とする国内動乱を回顧する時、この人々の憂国の思ひが杞憂でなかつたことが改めて知られて、感慨無量なものがある。（五九、六、一）